

## 私たちの願い

(社)日本植木協会では、「地域性苗木」を広く普及させることによって、古来から人々に親しまれ、豊かな環境をもたらしてきた地域特有の景観に貢献できると考えています。そして「生物多様性」・遺伝資源保全のみならず、公益的な立場から日本の森作りを支え、人と暮らしがより豊かなものになるよう願っています。

**(社)日本植木協会 地域性植物適用委員会**

〒107-0052

東京都港区赤坂6-4-22三沖ビル3F

電話 03-3586-7361

FAX 03-3586-7577

---

URL <http://www.ueki.or.jp/index.html>

---

## 地域性苗木による緑化

「生物多様性」という言葉がよく聞かれるようになった昨今、単なる緑作りや緑化ではなく、生態系のなかにおける機能性や役割を考慮した地域性苗木の生産が望まれています。

(社)日本植木協会では、計画地域に相応しい苗木の生産に取り組み、豊かな日本の自然環境整備に貢献していきます。

## 目次：

生物多様性への取り	1
地域性（生産履歴）	2
育苗のプロセス	3
採種	4
採種～芽生え	5
芽生え～育成	6
出荷～施工	7

## 1 生物多様性への取り組み

これまでの緑化樹生産とは、挿し木・接木による栄養繁殖（クローン）、限られた母樹からの播種による実生苗の生産がほとんどでした。2002年策定された「新・生物多様性国家戦略」、2004年「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」成立。2003年1月より施行された「自然再生推進法」による動植物の地域遺伝子保全が問われるようになった。当協会にでも地域性苗木の生産及び生産情報の発信・開示に取り組み、国の施策に協調し協力していく運びとなりました。

生態学や林学の研究者間でも様々な意見があります。工業製品とは違い生産に一定の年数が掛かる苗木生産にあたり、植物遺



伝情報の収集や「自然林再生を考える上での植栽方法」に適した苗木育成技術開発にいち早く着手いたしました。

以下項目に挙げるような信頼できるデータ提供と共有により、発注者・設計者・施工技術者と生産者との連携を深め国土の保全を目指していきます。また、発注・設計者側からの相談にも柔軟に対応できる体制を整え、培ってきたチームワークを発揮させ、より幅の広い事業への取り組みを予定しています。

つぎに現在の「地域性苗木」の生産状況や手法、自然再生の現場についてご紹介します。



## 2 地域性（生産履歴）の証明

農産物等の産地偽装が取りざたされる昨今、遺伝子解析による偽装解明手法が確立されましたが、緑化樹においてはどうでしょう。事業計画から施工までが一貫した管理下で生産される場合、外部から履歴不明苗木が混入する可能性は、ほとんど有りません。しかし施工時に苗木調達の一貫性が発生した場合、各々1本ずつ苗木の遺伝子解析を行うことは現実的には困難です。トレーサビリティとしては、採取（種）し

た母樹のGPS測地データと記録写真（成長までの一貫した）による管理を行い、また必要に応じて外部研究機関・研究者への客観的判定の依頼を行います。



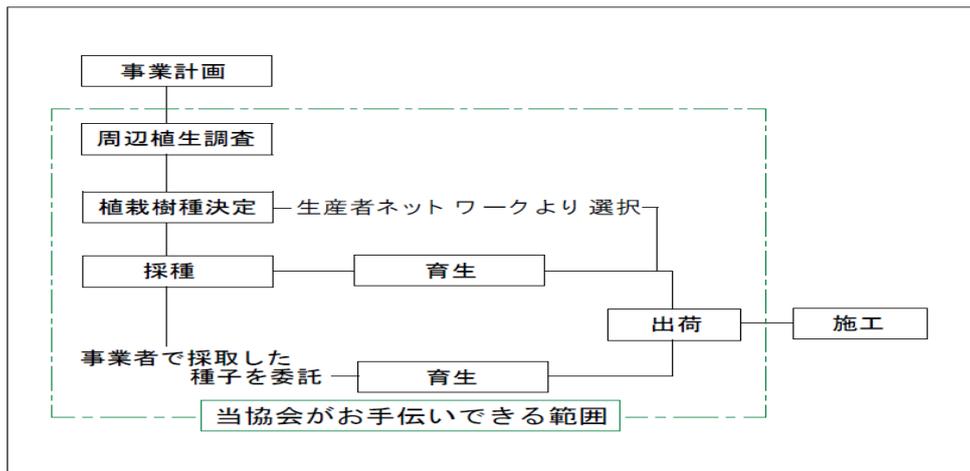
# 地球規模での生物多様性を守り、地域緑化の種を播く人

(社)日本植木協会 地域性植物適用委員会

## 3 育苗のプロセス

自然林復元及び回復事業を例に、育苗プロセスを下図に示します。大別すると、計画段階における樹種選定以降、採種から育苗まで一貫した管理体制下の苗木生産が行われる場合と、施工に当たっ

て生産者から計画地域に適した植物種及び数量を選択する2パターンが考えられます。(まだまだ多様性に適用した生産量は少く、計画に応じた予約生産が望ましい。)



アシナガコガネ (コバノガマズミ)

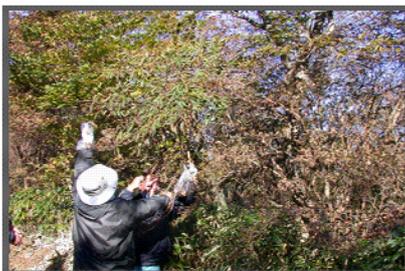


クマバチ (トベラ)

## 4 採種

事業計画において、植栽計画された植物の採取が行われます。地域性を考慮すると植物種によって採種可能範囲が異なります。一般的に風媒花種(風によって花粉媒介を行う)は遺伝子情報の拡散が広く広範囲での採種が可能です。昆虫によって花粉が媒介される虫媒花種はキャリアである昆虫の行動範囲を考慮する必要があります。また種子頒布方法の違いから種子の採種可能範囲も樹

種により限定されます。(ミツバチによる花粉媒介は半径500m位、カケスによるドングリ頒布範囲は1~2km位程度、アリによるカンアオイの種子頒布は数cmといわれている。)現在では、計画地域の周辺山域や近隣都府県内での採種が主に行われています。自然林や社寺の古木等からの採種記録には、GPSなどを用いた位置情報の記録や写真(母樹や種子の状態、周辺環境)の記録を行います。



採種状況



ハナイカダの果実



ブナ



オガタモノキ



アカガシ

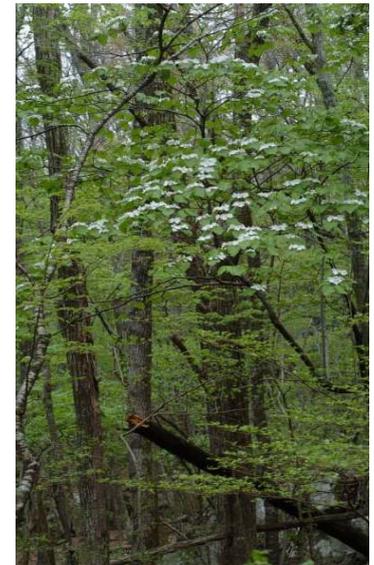
# 地球規模での生物多様性を守り、地域緑化の種を播く人

(社)日本植木協会 地域性植物適用委員会

## 5 播種～芽生え

採取(種)された種子は、その性質や形状によって果肉を取り除き洗浄をする等の処理が施され、取播きされるもの・翌春まで冷蔵保存して播種されるもの等、種の性質によって様々な管理がなされます。また、播種床の土

壌条件も植物種によっていくつかに区別され、覆土や発芽までの日照条件など適切な管理が施されます。(一般に先駆性の高い植物ほど日照条件が良い場所で発芽します)



ムシカリ咲く雑木林

## 6 芽生え～育成

露地栽培の場合、播種床で芽生えた稚苗を間引き、適切な間隔を残して成長させます。コンテナ栽培では、育苗箱もしくは露地で芽生えた稚苗の根を痛めないようにして、出荷時に見込まれる苗木サイズに見合ったコンテナに植え替えます。

これまでの緑化苗生産では肥培し成長を促進させ、規格(高さや葉張り)に早く到達させることに重点を置いてきました。しかし地域性適用植物では自然

に近い成長が求められることから、高さ・葉張りといった視覚的な規格を設けず、育成期間(2年生・3年生といった発芽からの生育年数)を目安とします。過度な肥培管理せずに育成した苗は、従来の緑化苗と比較して大きさや端麗さといった点で見劣りしても、健全に育てられた苗は根張りが良好で細根も多く、植栽施工後の活着率向上が見込まれることがこれまでの事業実績において明らかになっています。



モミノキのある風景



杉林皆伐後の植栽現場例

## 7 出荷～施工

出荷時には管理記録を含めた証明書を添付し、必要に応じて外部研究機関等への分析依頼による証明を行います。